

原著論文

柑橘栽培の作業が障がい者に与える精神的影響 —J-SACL の改変に基づく質問紙法による調査—

鵜飼一博*、太田智**

(*静岡県立農林環境専門職大学短期大学部, **静岡県立農林環境専門職大学生産環境経営学部)

Mental Impact of Citrus Cultivation Work on People with Disabilities —A Questionnaire Survey Based on a Modification of the J-SACL—

UGAI Kazuhiro*, OHTA Satoshi**

(*Shizuoka professional University Junior College of Agriculture, **Faculty of Agricultural Production and Management)

<要約>

柑橘栽培における摘果、袋掛け及び収穫作業を通して障がい者が受ける心理面のストレス及び満足度等を質問紙法にて調査した。農福連携に興味がある静岡県内の就労継続支援事業所（5 事業所）から派遣された障がい者 33 人が作業を体験したが、質問事項を十分理解していると考えられた 14 人の回答結果を分析した。その結果、次のことが分かった。①柑橘栽培の作業において、1 時間程度であれば、おおむねストレス因子は緩和、覚醒因子は増大する。②作業において、判断の必要性やルールが多さによって、ストレス因子や覚醒因子に与える影響が異なる。③満足度の「楽しさ」「苦しさ」「難しさ」とストレス因子・覚醒因子との相関は強くない。④「楽しさ」「苦しさ」「難しさ」のそれぞれ二者間には相関はなく、ほとんどの参加者は柑橘栽培を「楽しい」と評価した。

<キーワード>

農福連携、障がい者、柑橘栽培、ストレス、満足度

I. はじめに

農福連携とは、障がい者等が農業分野で活躍することを通じ、自信や生きがいを持って社会参画を実現していく取組とされる。この連携により、農業分野における担い手不足や高齢化、福祉分野における仕事の確保や賃金の向上といった課題の解決が期待されている（農福連携等推進会議、2019）。

近年、官民挙げて農福連携の推進を図っている。内閣官房長官を議長とした農福連携等推進会議、経済団体、農林水産業団体、福祉団体その他の関係団体、地方公共団体、関係省庁等の様々な関係者が参加している農福連携等応援コンソーシアム、並びに農福連携に関係する生産者、福祉事業所、企業、団体、行政、消費者等、さまざまな団体・人々が参画でき連携するプラットフォームとしての役割を

担う一般社団法人日本農福連携協議会などが、設立されている。農林水産省をはじめとする省庁は、パンフレット（法務省他、2023）やマニュアル（厚生労働省他、2023；農林水産省他、2023；独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構農村工学研究所編集、2013；独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構農村工学研究所、2009）を作成し、支援している。これらの活動の結果、2022 年度末時点で農福連携に取り組む主体は 6,343 件まで広がっている（農林水産省、2023）。

農福連携に関する研究の多くは、福間（2020）、合田（2020、2021）、本田ら（2018）、香月（2020）、中本ら（2022）、吉田（2019）に代表される現状分析や課題の抽出である。

農福連携をさらに進めるためには、農作業が障

がい者の精神や健康に及ぼす影響等の科学的なデータの蓄積も必要である。

農業は自然に触れたり、植物や動物を育てることを通して障がい者にとって治療的効果があったり（近藤、2013）、農作業は障がい者に適性がある（大澤、2010）と言われている。また、農林水産省（2014）は、農業活動に取り組んだことにより身体障害は13%、知的障害又は精神障害は26%でその状況の改善が見られたと報告している。豊田ら（2022）は、健康改善項目と改善理由の相関について調査し、心理的・身体的ストレスと他者からの支援、自己肯定感や自信と多様な作業体験との間に強い正の相関があったと報告している。しかしながら、農作業が障がい者に及ぼす精神的影響に関する研究はいまだ少なく、数値的なデータは乏しい。

そこで、本研究では柑橘栽培の作業が障がい者に及ぼす精神的な影響について、質問紙法にてストレス及び作業の感想に関する調査を実施し、それを明らかにすることを目的とする。

II. 調査方法

1. 被験者

農福連携に興味がある静岡県内の就労継続支援事業所（5事業所）から派遣された障がい者33人を対象とした（表1）。

2. 調査の手順

- ①本学果樹実習室に集合し、心理面のストレスに関する調査票（以下「ストレスチェック票」と言う。）に記入してもらった。
- ②スライドや実物等を用いて、作業内容（摘果、袋掛け、収穫）を分かり易く説明した。
- ③本学内の柑橘栽培の圃場（平坦な地形）に移動し、実際にお手本を示した後、各自で練習をしてもらった。やり方を理解できていない人や

上手にできない人には助言を行った。作業対象としたカンキツは、全て中晩性カンキツ品種の‘不知火’、‘はるみ’、‘せとか’である。なお、3つの品種は、平均的な果実のサイズや形には大きな差がないため、作業性に影響しないと考えられるものを選んだ。

④ある程度できるようになってから一斉に作業を開始した。本番の作業は、摘果が平均10分間、袋掛けが平均25分間、収穫が平均13分間で、どの作業とも圃場にいた時間は約1時間である。

⑤作業後、摘果、袋掛け又は収穫した果実の個数を数えてもらった。

⑥再び果樹実習室に戻り、ストレスチェック票及び満足度等に関する調査票（以下「満足度等調査票」と言う。）に記入してもらった。

①から⑥までに要した時間は概ね2時間であった。

3. 作業内容

2022年7～9月に摘果、10～11月に袋掛け、2023年1～2月に収穫を、次の方法にて行った。

（1）摘果

摘果では、葉100枚につき果実1個（葉果比100）となるように、多すぎる果実を落とした。葉100枚は、数えるのではなく、おおよその目安を教えた。色が違う果実（変色）、割れている果実、キズがある果実、変な形の果実（変形果）、及び小さい果実の5種類を落とすよう指示した。ただし、それらを落としても葉果比100にならない場合、良い果実であっても1つを残して他は落とすようにした。摘果は、軍手をして行い、果実を掴んで枝と果実の付け根を捻りながら引っ張ると取りやすいと教えた。

表1. 被験者

							単位：人
	10代	20代	30代	40代	50代	60代	計
男	6 (2)	7 (4)	3	1 (1)	4 (2)	2	23 (9)
女	2	2 (1)	1	5 (4)			10 (5)
計	8 (2)	9 (5)	4	6 (5)	4 (2)	2	33 (14)

注：（ ）内の数字は分析対象者数

(2) 袋掛け

袋掛けには、果実袋サンテ（東レコムズ愛媛株式会社、愛媛県）を利用した。障がいのある人にも比較的無理なく扱えると考え、紙製のものでなく伸縮性のある素材を選択した。また、サンテは筒状で上下に穴が空いているため、どちらからでも果実に被せることができる。なお、すべての果実に袋をかけて良いため、判断の必要な作業ではないと考えられるが、袋の上や下の穴から果実が見えないよう注意してもらった。両手で行うのが難しいと感じる場合は、最初に片手にサンテを通して、その手で果実を掴み、他方の手でサンテの端を引っ張る方法もあると伝えた。

(3) 収穫

収穫は収穫鉋を用いて行った。すべての果実を収穫するよう指示した。そのため、どの果実を収穫すれば良いかといった判断の必要はなかった。

一方で、果梗枝（果実のついた枝）の根元で一度切り、次に果実と枝の境目で切るように指示したため、果梗枝の根元を見極める必要があった。

なお、先に行った袋掛けの袋が掛かっているため、それを外す手間があった。収穫した果実は、肩掛け式の袋に入れてもらった。

4. ストレスチェック票

人間における主なストレス反応は、心理面、行動面、身体面の3つに分けることができ（坪井、2010）、最も早い時期に生じるのが心理面（情動の変化）であるとされる（Cox and Mackey、1985）。

表2. J-SACL で用いられる日本語情動語

ストレス因子		覚醒因子	
+	－	+	－
やりきれない	*快適な	活気に満ちた	頼りない
憂鬱な	*心地よい	*生き生きした	辞めたい
沈んだ	*和やかな	*爽快な	つまらない
苛立たしい	*穏やかな	うきうきした	怠惰な
暗い	*幸福な	わくわくした	けだるい
重苦しい	居心地よい	元気な	
心細い	*ほっとした	すがすがしい	
情けない	*安らかな		
腹立たしい			

*：ストレスチェック票で採用した情動語

表3. 満足度等調査票

質問事項	回答（選択式）			
	2点	1点	0点	-1点
楽しかったですか？	とても楽しかった	まあまあ楽しかった	わからない	楽しくなかった
苦しかったですか？	とても苦しかった	まあまあ苦しかった	わからない	苦しくなかった
難しかったですか？	とても難しかった	まあまあ難しかった	わからない	難しくなかった
またやりたいですか？	またやりたい	またやってもよい	わからない	やりたくない
毎日でもやりたいですか？	毎日やりたい	ときどきやりたい	わからない	やりたくない
ほかの農業もやってみたいですか？	とてもやりたい	まあまあやりたい	わからない	やりたくない
農作業は自分に合っている	とても合っている	まあまああっている	わからない	合っていない
また来るのが楽しみ	とても楽しみ	まあまあ楽しみ	わからない	楽しみでない
空気が澄んでいて 気分が良くなった	とても気分が良かった	まあまあ気分が良かった	わからない	気分が良くなかった

表 4. 分析対象者

被験者	年齢	性別	手帳の種類	特記事項	参加作業		
					摘果	袋掛け	収穫
A	18	男	療育手帳 B	広汎性発達障害、自閉症	○	○	
B	19	男	療育手帳 B	自閉症	○		○
C	20	男	療育手帳 B	愛着障害の疑い	○		
D	20	男	療育手帳 B		○	○	○
E	20	男	療育手帳 B	てんかん		○	
F	25	男	療育手帳 B		○	○	
G	49	男	療育手帳 B		○	○	○
H	53	男	精神障害者保健福祉手帳 2 級	統合失調症（妄想）	○		
I	57	男	精神障害者保健福祉手帳 3 級	統合失調症（妄想）	○	○	○
J	20	女	療育手帳 B		○	○	○
K	41	女	療育手帳 B		○	○	○
L	42	女	精神障害者保健福祉手帳 3 級	うつ	○	○	○
M	44	女	精神障害者保険福祉手帳 1 級	精神（てんかん）		○	
N	47	女	療育手帳 A		○	○	
					12 人	11 人	7 人

ストレス調査には、質問紙法と唾液や血液成分等を指標とした生理的ストレス測定があるが、簡単に実施でき、心理面のストレス（情動の変化）を数値化できる日本語版 SACL（以下「J-SACL」と言う。）（表 2）に準拠した方法を採用した。

J-SACL は、Mackay et al (1978)、Cox and Mackay (1985) により作成された Stress-Arousal Check List (SACL) を八田 (2010) が単なる訳語でなく日本語に合う形であらたに情動語を選別して作成した調査票である。短時間で回答でき、その評価を定量的にできることが特徴である。

本調査では、J-SACL の 30 の情動語（質問項目）から、前年度に実施した予備調査で障がい者が理解しやすかった 9 項目を選択した（表 2）。評価は J-SACL の方法に準じ、「ぴったり当てはまる」を 2 点、「だいたい当てはまる」を 1 点、「わからない」を 0 点、「当てはまらない」を -1 点とした。

5. 満足度等調査票

満足度等に関する質問内容及び評価方法は表 3 のとおりである。

Ⅲ. 結果

1. 分析対象者

ストレスチェック票に記入する場面において、質問の文章をしっかりと読まず、全ての質問に「ぴったり当てはまる」又は「当てはまらない」と回答した被験者が見られた。質問内容を理解していない者がいる可能性を否定できなかったため、就労継続支援事業所の職員（就労支援員）にアンケートの質問項目を見ていただき、信頼性のあるアンケート結果が得られていない作業者を障害の程度や理解力から判断していただいた。以上をふまえ、質問事項を十分理解し回答したと考えられる 14 人を分析対象者とした。分析対象者の年齢、性別、障害の種類と程度及び参加作業は表 4 のとおりである。

摘果で 26 人中 12 人、袋掛けで 26 人中 11 人、収穫で 24 人中 7 人が分析対象となった。

2. 心理面のストレス

J-SACL の診断結果は、ストレス因子と覚醒因子の 2 軸に分けられることから、各作業の作業前後のストレス因子及び覚醒因子の変化を図 1 に示す。ストレス因子は＋方向がよりストレスを感じ、－

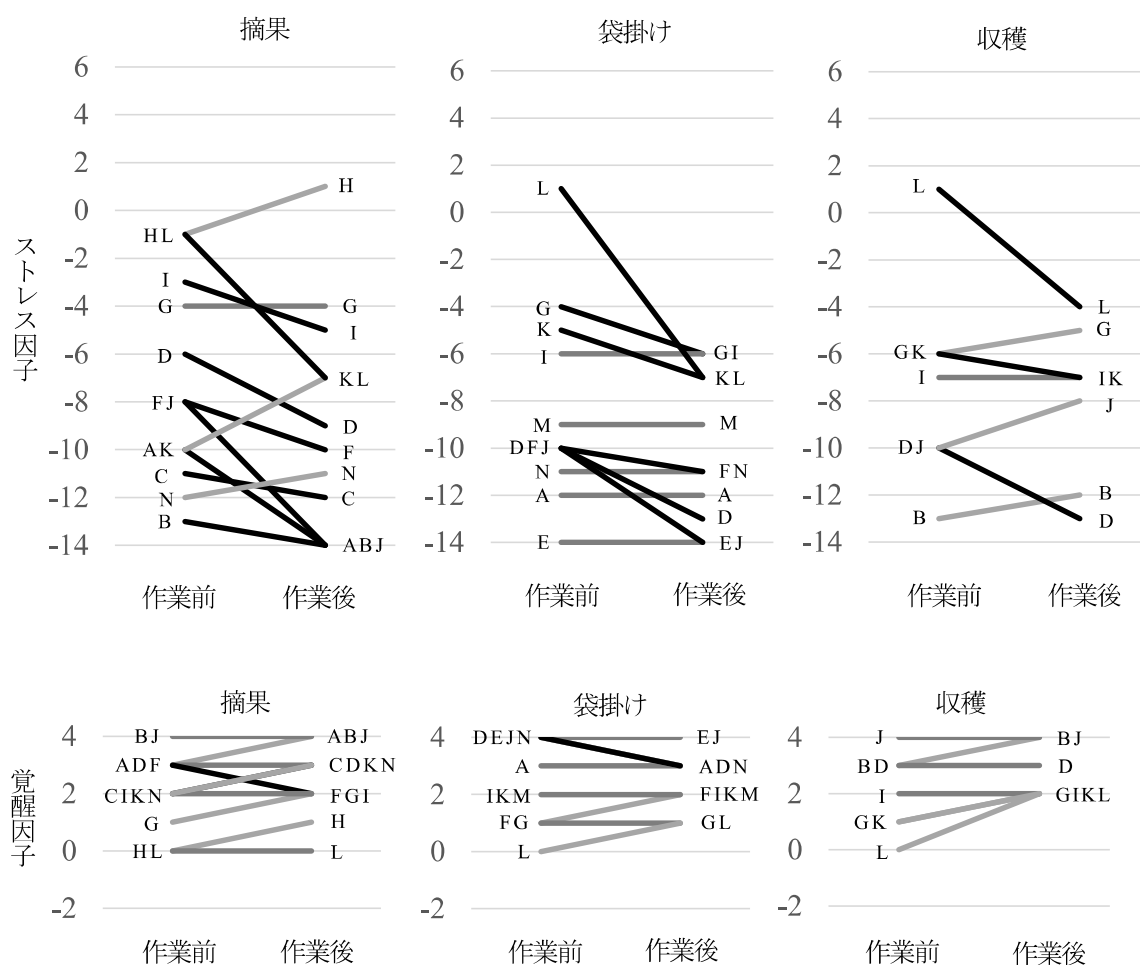


図1. 作業前後におけるストレス因子と覚醒因子の変化

A～N：分析対象者

方向がストレスを感じないと診断する。覚醒因子は、生き生き感とも言われ、＋方向が生き生き感到満ちており、－方向は生き生き感が喪失している状態である。したがって、ストレス因子の変化は右肩下がり、逆に覚醒因子の変化は右肩上がりの方が望ましい。

作業前のストレス因子が－である人が多く、もともと強いストレスを感じていない人が多かった。作業前の覚醒因子はほとんどの人が＋であり、生き生き感を持っていた。

これら因子の作業前後における変化量と人数を図2に示す。

摘果における変化は、ストレス因子で最大3、最小-6、平均-1.6、変化なしは12人中1人、覚醒因子では最大1、最小-1、平均0.4、変化なしは12人中5人であった。

袋掛けにおける変化は、ストレス因子で最大0、最小-8、平均-1.8、11人中5人が変化なし、覚醒因子では最大1、最小-1、平均0.0、11人中7人が変化なしであった。

収穫における変化は、ストレス因子で最大2、最小-5、平均-0.7、7人中変化なしは1人、覚醒因子では最大2、最少0、平均0.7、7人中3人が変化なしであった。

各作業の作業前後のストレス因子の変化の平均値について、分散分析を行った結果、有意差は見られなかった ($F(2,28)=3.34, P>0.05$)。同じく覚醒因子の変化の平均値にも有意差は見られなかった ($F(2,28)=3.34, P>0.05$)。

3. 満足度等

作業後の満足度等の平均値を図3に示す。各質

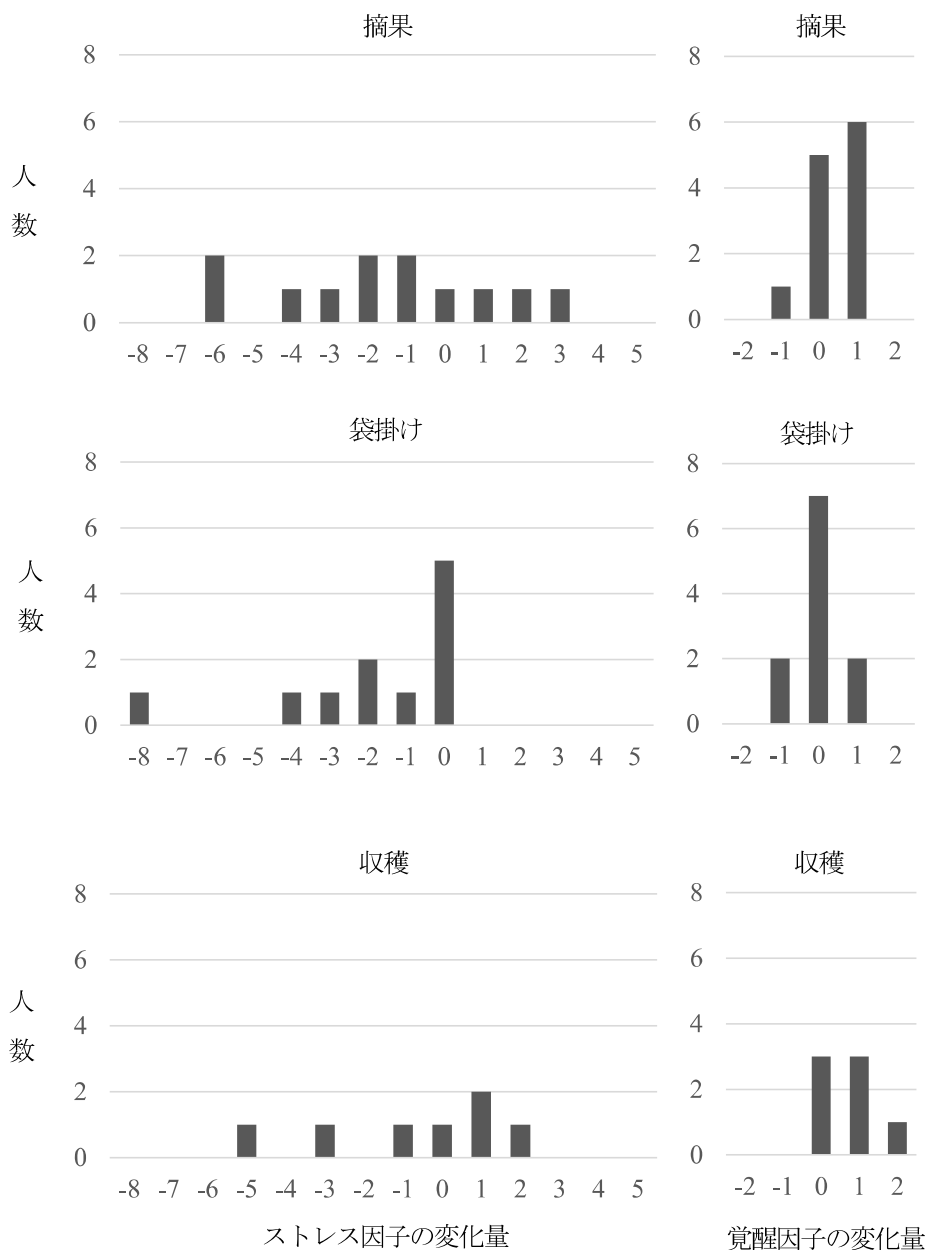


図2. 作業毎のストレス因子及び覚醒因子の変化量

間において、最大は2、最小は-1である。

「楽しかった」については、摘果、袋掛け、収穫の平均値は、それぞれ 1.7、1.7、1.6 で有意な差はなかった ($F(2,27)=3.35, P>0.05$)。

「苦しかった」の摘果、袋掛け、収穫の平均値は、それぞれ 0.2、-0.2、-0.9 で有意な差はなかった ($F(2,27)=3.35, P>0.05$)。

「難しかった」の摘果、袋掛け、収穫の平均値は、それぞれ 0.9、0.4、0.6 で有意な差はなかった ($F(2,27)=3.35, P>0.05$)。

「またやりたい」「毎日でもやりたい」「ほかの作業がやりたい」「作業は自分に合っている」「また来るのが楽しみ」「空気が澄んでいて気分が良い」については、平均値は、0.9 から 1.9 に分布していた。各作業の平均値には収穫>袋掛け>摘果の傾向が見られたが、有意な差はなかった ($F(2,177)=3.04, P>0.05$)。

作業の感想である楽しさ、苦しさ及び難しさの回答割合を図4に示す。

楽しさについては、どの作業においても、「とて

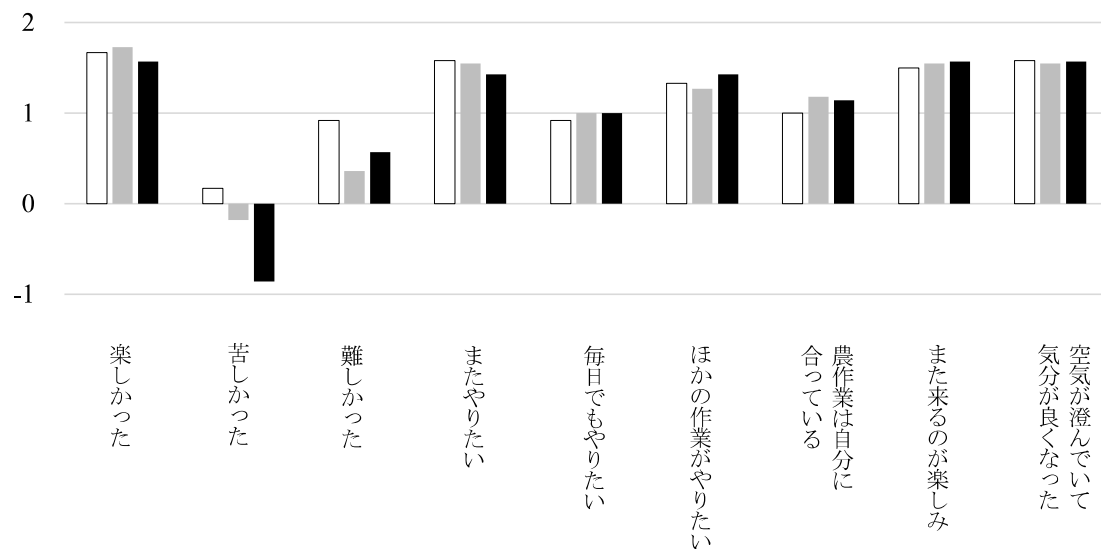


図3. 満足度等に関する平均値

凡例 □ : 摘果 ■ : 袋掛け ■ : 収穫

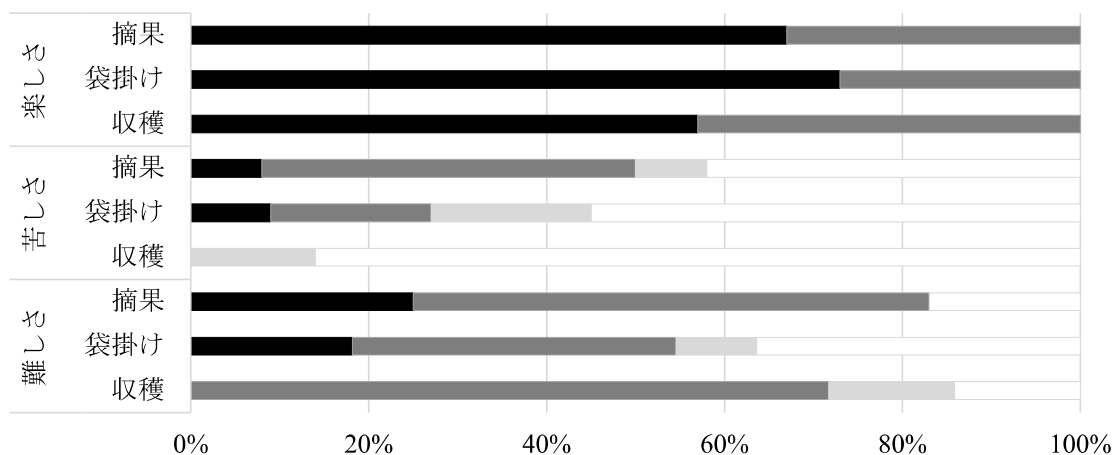


図4. 楽しさ、苦しさ、難しさに関する回答結果

凡例 ■ : 2点 ■ : 1点 ■ : 0点 □ : -1点

表5. ストレス因子・覚醒因子と楽しさ・苦しさ・難しさの相関係数

	ストレス因子の変化量との相関係数			覚醒因子の変化量との相関係数		
	楽しかった	苦しかった	難しかった	楽しかった	苦しかった	難しかった
摘 果	-0.60 *	0.49	-0.30	-0.37	0.51	-0.08
袋掛け	-0.13	0.39	-0.29	0.00	-0.15	-0.13
収 穫	-0.27	0.30	-0.35	0.06	0.17	0.60

* : $p < 0.05$

も楽しかった」または「まあまあ楽しかった」と回答しているが、苦しさや難しさについては、作業毎に感想は大きく異なっていた。収穫においては、とても苦しいやとても難しいと回答した被験者は皆無であったが、摘果及び袋掛け作業においては、とても苦しいやとても難しいと回答した被験者がいた。収穫において、苦しいと感じた被験者は皆無であった。

なお、どの作業においても、「楽しさ」「苦しさ」「難しさ」のそれぞれ二者間に相関は見られなかった。

4. 心理面のストレスの変化と満足度等の関係

満足度等のうち「楽しかった」「苦しかった」「難しかった」の3項目と心理面のストレスにおけるストレス因子と覚醒因子との相関係数を表5に示す。

(1) ストレス因子の変化と満足度等

ストレス因子と楽しさの関係については、全ての作業において負の相関（楽しく感じた人ほどストレスが緩和される傾向）が見られた。

ストレス因子と苦しさの関係については、全ての作業において正の相関（苦しく感じた人ほどストレスが増大する傾向）であった。

ストレス因子と難しさについては、全ての作業において負の相関（難しく感じた人ほどストレスが緩和された）が見られた。

摘果作業におけるストレス因子と楽しさとの関係は、やや相関ありで、無相関検定の結果、有意であった。しかし、それ以外の各作業におけるストレス因子と満足度との関係については、相関も弱く、有意でなかった。

(2) 覚醒因子の変化と満足度等

覚醒因子と楽しさの関係については、摘果で負の相関が見られたが、袋掛けと収穫においてはほとんど相関が見られなかった。

覚醒因子と苦しさの関係については、摘果ではやや相関があったが、袋掛けと収穫においてはほとんど相関がなかった。

覚醒因子と難しさについては、収穫において正の相関（難しく感じた人ほど生き生き感が増大する傾向）が見られたが、摘果と袋掛けではほとんど相関が見られなかった。

覚醒因子の変化と満足度の指標間の相関には有意でなかった。

IV. 考察

1. ストレスチェック票

予備調査の結果から、J-SACLの30項目の質問から障がい者にも理解しやすい9項目を選別したにも関わらず、被験者数の42%しか分析に使用できなかった。理解力だけの問題でなく、回答のために必要な集中力の問題であったかもしれない。しかしながら、わかりやすい質問に限定し、わかりやすい言葉に直すことで、知的障がい者に対しても一定程度質問紙法の利用が可能であることが示唆された。今後は、より多くの障がい者の心理面のストレスや満足度を調査するに当たり、質問紙法だけでなく、直接聞き取りを行うことが有効と考えられた。

2. 心理面のストレスの変化

摘果、袋掛け及び収穫作業前後におけるストレス因子の変化について、ストレス緩和方向に変化した割合は、それぞれ67%、55%、43%、ストレス増大方向への変化は25%、0%、43%であった。

袋掛け作業は、特に判断を要しない作業であったことから、ストレスが増大した人が皆無であったと考えられる。

摘果作業では2つの判断（葉を数えることと摘果すべき果実を見つけること）をしなければならぬことで、ストレスを感じた人が出現したが、今回は試験研究ということで判断基準は厳密とはしなかったことから、ストレスを感じない人の方が多かったのではないかと考える。

収穫は全て収穫するため果実を選別する必要はないが、果梗枝の切断に関するルールが厳密だったため、ストレスを感じる人の割合が一番多かったと考えられる。

それぞれの作業前後における覚醒因子の変化については、生き生き感の増大割合は50%、18%、57%、生き生き感の喪失は8%、18%、0%であった。ストレス因子とは逆で、判断を要したり、作業ルールがあった摘果と収穫において、生き生き感が増大した人が多く、袋掛け作業においては生き生き感が増大した人の割合が低かった。

ストレス因子の変化と比較すると、覚醒因子は

悪い方向への変化の割合が低かった。これは、作業を完遂できたことから来る喜びや達成感との関係によると考える。

豊田ら(2022)によると、農作業による心理的・身体ストレスの改善について、適度に身体を使うためストレス軽減に働くことが示唆されているが、今回の調査結果でもおよそ同じ傾向が見られた。

片倉ら(2007)によると、精神障がい者にとって、長時間労働は難しく、作業時間は1日2~4時間程度が望ましいとされる。今回は調査票の回答時間、説明及び作業をあわせて2時間であったことから、作業時間の長さ起因するストレス感の増大や生き生き感の喪失が顕著に現れなかったと考える。

3. 心理面のストレスの変化と満足度等

摘果、袋掛け及び収穫作業とも「とても楽しかった」が67%、「まあまあ楽しかった」が33%と、全員楽しかったという感想であったが、苦しさや難しさの点数は、各作業で大きく異なる結果となった。

「難しさ」を見た場合、どの作業も難しいと感じており、その中でも摘果がもっとも難しいと評価された。摘果は他の作業に比べてルールが複雑で判断を要することから難しいと評価されたと考えられる。袋掛け作業は、扱いやすい袋を選定したが、初めての作業であり、難しさを感じたと考える。収穫は難しい判断を要しないものの収穫鉢を始めて使ったり、切断ポイントが決められていることでやや難しさを感じたと考えられる。

「苦しさ」を見た場合、わずかであるが摘果作業では苦しいと感じているが、袋掛けや収穫を苦しくは感じていない人が多かった。「苦しさ」については、作業内容などとの関係性が見られないことから、作業姿勢などの別の因子が働いたのではないかと考える。

ストレス因子・覚醒因子の変化量と「楽しさ」「苦しさ」「難しさ」の相関を見た場合、やや相関があったのは摘果作業におけるストレス因子と「楽しさ」だけであり、ほとんどは相関がないか、弱い相関がみられる程度であった。農作業は工場内での作業に比べ、自然環境下で複雑な作業が少ない、マイペースで出来る、対人ストレスが低い等と指摘されている。これらが、農作業で感じる「苦しさ」や「難しさ」を上回ったため、ストレス感や生き生

き感に直結しなかったと考える。

「またやりたい」「ほかの作業もやりたい」は比較的高い評価となっていることから、「苦しさ」や「難しさ」を感じても、それよりも「楽しさ」の方が優先されたと考える。例えば、登山者が山頂までの道のりはきつく肉体的な疲労を感じるものの、山頂での景色から得る癒しや達成感の方を強く感じることに同じだと考える。ただし、「毎日でもやりたい」については、「またやりたい」と比較してやや低い評価であった。時々室内から屋外に出て作業することは楽しいことであるが、毎日になると肉体的疲労度が増したり、判断を求められる時間が増すことになるため、毎日の仕事とすることに対しては、やや拒否する人が出てきたということであろう。特に、精神障がい者にとっては、継続的に仕事に就くことが困難であるため、「毎日でもやりたい」を積極的に選ばなかったものと考えられた。

「また来るのが楽しみ」「空気が澄んでいて気分が良くなった」の評価は他の項目よりも評価が高かった。「毎日でもやりたい」や「農作業は自分に合っているか」の評価が、それらよりも低いことから、作業所(室内)にいるのではなく、時折外に出ることは楽しいが、毎日でなくても良いという表れと考えられる。

V. おわりに

柑橘栽培の摘果、袋掛け及び収穫作業を通じ、障がい者の心理面のストレスや作業の満足度等の調査を実施した結果、次のことが分かった。

- ・ 健常者用に作成されたストレスチェック(J-SACL)を、わかりやすい質問に限定し、わかりやすい言葉に直すことで、知的障がい者に対しても一定程度質問紙法の利用が可能である。
- ・ 柑橘栽培の作業において、1時間程度であれば、おおむねストレス因子は緩和、覚醒因子は増大する。
- ・ 作業において、判断の必要性やルールの多さによって、ストレス因子や覚醒因子に与える影響が異なる。
- ・ 満足度の「楽しさ」「苦しさ」「難しさ」とストレス因子・覚醒因子との相関は強くない。
- ・ 「楽しさ」「苦しさ」「難しさ」のそれぞれ二者間には相関はなく、ほとんどの参加者は柑橘栽培

を「楽しい」と評価した。

今後は、より様々な作業毎、作業時間、作業の習熟度による心理面のストレスや満足度についての調査を通じて、障がい者にとって働きやすい農業とはどのようなものか研究を継続していきたい。

また、障がい者が重くアンケートの回答が難しい者に対する調査方法の開発が今後の課題である。

謝辞

柑橘栽培作業に参加し、調査に協力いただいた就労継続支援事業所の皆さんに感謝申し上げます。

引用及び参考文献

Cox, T・Mackay, C. 1985. The measurement of self-reported stress and arousal. British Journal of Psychology 76:183-186

独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構農村工学研究所. 2008. 平成19年度農村生活総合調査研究事業報告書 農業分野における障害者就労の手引き―作業事例編―

<https://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/noufuku/attach/pdf/pamphlet-1.pdf>
(2023年12月23日参照)

独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構農村工学研究所編集. 2013. 農業分野における障害者就労マニュアル

<https://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/attach/pdf/kourei-42.pdf>
(2023年12月23日参照)

福岡隆康. 2020. 農業分野における障がい者の就労継続―岡山県内の就労継続支援A型事業所を対象とした質的調査―. 高知県立大学紀要社会福祉学部編. 69:45-59

合田盛人. 2020. 農福連携における発達障害者の就農の現状と今後の課題―A 農園のインタビュー調査の分析から―. 長野大学地域共生福祉論集. 14:23-30

合田盛人. 2021. 農福連携において長期にわたる雇用の現状と課題―農業者が障害者を直接雇用するケースから―. 長野大学紀要. 42(3):11-21

八田武志. 2010. J-SACL 情動語によるストレス診断テストマニュアル (第2版). 16pp. (株FIS

法務省・文部科学省・厚生労働省・農林水産省. 2023. 福祉分野に農作業を～支援制度などのご案内～

Ver.11

<https://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/noufuku/attach/pdf/pamphlet-8.pdf>

(2023年12月23日参照)

本田恭子・渋谷直樹. 2018. 就労継続支援にもとづく農福連携の現状―岡山県と大分県を事例に―. 環境情報科学学術研究論文集. 32:257-262

岩岡正博・若林望・猪俣雄太. 2017. 林業労働者が作業や環境から受ける精神的ストレスの程度. 森林利用学会誌. 32(1):33-36

金井るみ・岩岡正博・松本武. 2023. フォワード走行作業は精神的ストレスを与えるのか?. 日本森林学会大会発表データベース. 134:189

香月敏孝. 2020. 農福連携に関する論点と新たな課題. 農業問題研究. 52(1):23-30

近藤龍良. 2013. 農福連携による障がい者就農. 164pp. (株創森社

厚生労働省・農林水産省. 2023. はじめよう農福連携―スタートアップマニュアル― (1 農業者・障害福祉サービス事業所 向け) Ver. 4

<https://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/noufuku/attach/pdf/pamphlet-10.pdf>
(2023年12月23日参照)

Mackay, C・Cox, T・Burrows, G・Lazzerini, T. 1978. An inventory for the measurement of self-reported stress and arousal. Br. J of Soc. and Clinic. Psychology. 17:283-284

中本英里・豊田正博・山本俊光. 2022. 農福連携の取組が農業経営にもたらす影響. 農林業問題研究. 58(2):98-105

農福連携等推進会議. 農福連携等推進ビジョン. 2019年6月4日

農林水産省. 2014. 平成25年度都市農村共生・対流総合対策交付金事業「農と福祉の連携についての調査報告書 (NPO 法人日本セルフセンター) 農林水産省. 2023. 農福連携の取組主体数について (令和4年度末).

https://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/noufuku/suisin_kaigi.html
(2023年12月23日参照)

農林水産省・厚生労働省. 2023. はじめよう農福連携―スタートアップマニュアル― (2 地方自治体・JA 向け) Ver. 4

<https://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/>

noufuku/attach/pdf/pamphlet-9. pdf

(2023 年 12 月 23 日参照)

- 大澤史伸. 2010. 農業分野における知的障害者の雇用促進システムの構築と実践. 142pp. (株)みらい
- 館山壮一・宮城好郎. 2022. 福祉的就労において農福連携が果たす意義と役割. 修紅短期大学紀要. 42:1-12
- 豊田正博・金子みどり・横田優子・浅井志穂・札幌高志・城山豊. 2016. 知的障害者就労支援における農作業分析と難易度評価法の開発. 人植関係学誌. 15(2):1-10
- 豊田正博・山本俊光・中本英里・剣持卓也. 2022. 農福連携で農作業を行う知的障害者および精神障害者の健康改善効果. 人間・植物関係学会雑誌. 22(1):1-2
- 坪井康次. 2010. ストレスコーピングー自分でできるストレスマネジメントー. 心身健康科学. 6(2):59-64
- 安中誠司・山下仁・片山千栄・石田憲治. 2010. 農業分野での障がい者就労の類型化による支援課題の抽出とその解決方策. 農村工学研究所技報. 210:49-59
- 吉田行郷. 2019. 農業分野での労働力不足化における農福連携の取り組みの現状と展望. 農業市場研究. 28(3):11-21